

PROの各論 基礎 - レスponsシフト -

東北大学医学系研究科障害科学専攻肢体不自由学分野
鈴嶋よしみ
2014年6月21日

1. レスponsシフトとは
2. レスponsシフトのメカニズム
3. レスponsシフトの検出手法
4. レスponsシフトの異なる視点
5. レスponsシフト研究・活用の課題

■ 例: アウトカム評価

治療A開始前の(アウトカム)は 20 ± 5 であったが、治療後には 30 ± 5 点であり、(アウトカム)は有意に向上した($p < 0.05$)。

■ 1999: Sprangers and Schwartz

- 医療評価におけるこの問題を初めて報告。
- 教育学分野で使われていた「レスponsシフト」の概念を導入
- 理論モデルを提示

測定する概念と尺度が一定である(変化しない)ことが前提

- 現実世界では変化する...
- 真の値が下がっていてもQOL得点は差がなかったり、真の値が変わっていてもQOL得点は高く(低く)なったり

レスponsシフトとは

健康の変化により、PRO尺度に回答する際の個人内の判断基準が変化すること

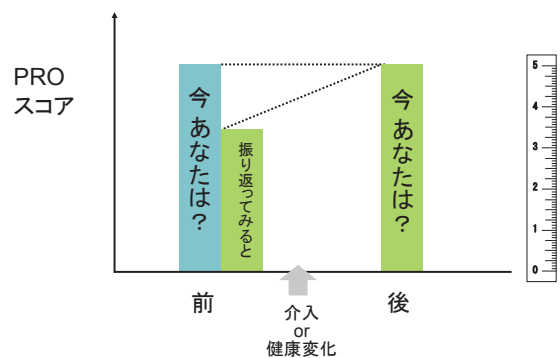
QOL/PRO指標の評価の際の測定バイアス

レスponsシフトの3分類

- 内的基準の変化:
internal standards (recalibration)
- 価値の変化:
value (reprioritization)
- 意味の変化:
meaning (reconceptualization)

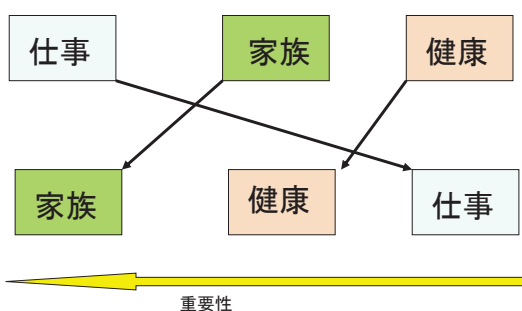
1. 内的基準の変化

Change in internal standards (recalibration)



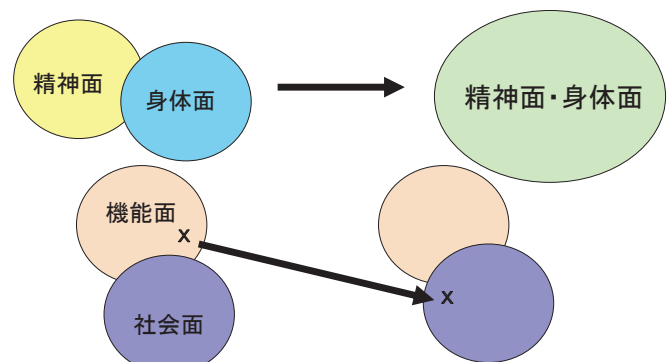
2. 価値の変化(要素の優先順位の変化)

Change in values (reprioritization)



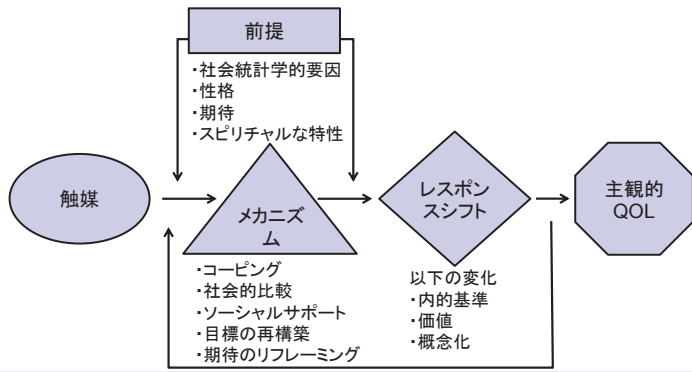
3. 意味の変化(概念の再構成)

Change in meaning (Reconceptualization)



レスポンスシフトのメカニズム

Sprangers and Schwartz (1999)



レスポンスシフトの検出手法の発展

個々に尋ねる方法

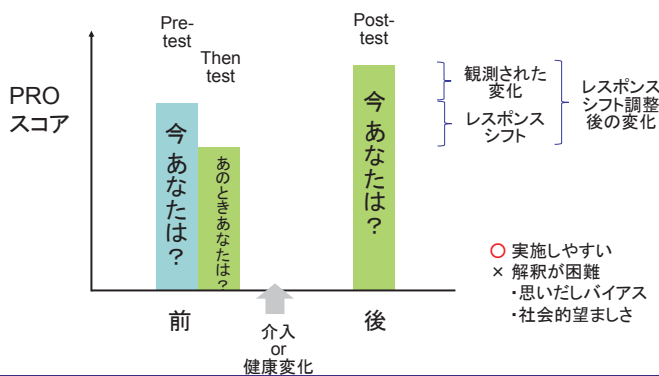
1. 振り返り評価 retrospective rating (Then test)
2. 個別化された評価 individualized methods (SEIQOLなど)

データに尋ねる方法: 統計的手法

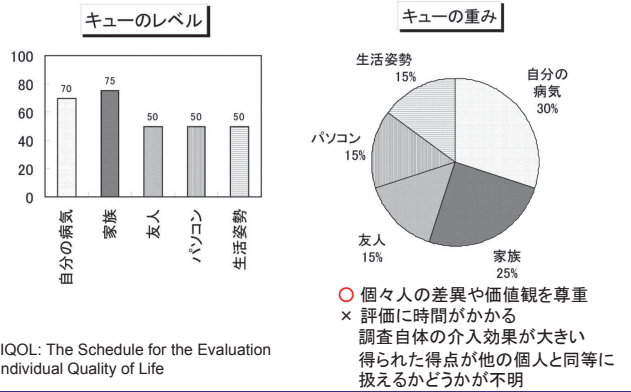
1. 構造方程式モデリング(SEM)
2. 潜在軌道解析(latent trajectory analysis)
3. 分類回帰木解析(classification and regression tree analysis)
4. 項目反応理論(Item response theory)

Barclay-Goddard R, et al. 2009より抜粋

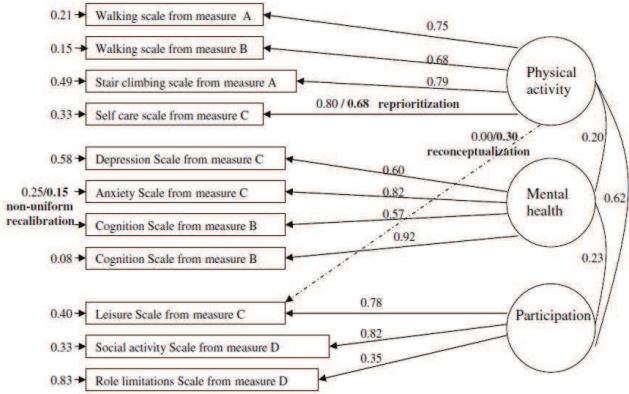
Then test (振り返り評価)



個別化された評価: SEIQOL



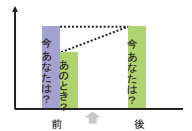
構造方程式モデリング(SEM)による検出



レスポンスシフトの異なる視点

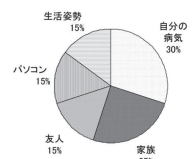
■ 測定バイアス

- 臨床試験の評価を過大評価、または過小評価



■ 心理的適応

- 健康障害があっても、人の感じ方を良い状態に保つためのホメオスタシスプロセス



Review

Psychological adjustment to chronic disease

Densie de Ridder, Rinie Geenen, Roelien Kuijer, Henriët van Middendorp

Lancet 2008; 372: 246-55
This Review discusses physiological, emotional, behavioural, and cognitive aspects of psychological adjustment to chronic illness. Reviewing the reports of the past decade, we identify four innovative and promising themes that are relevant for understanding and explaining psychological adjustment. In particular, the emphasis on the reasons why people fail to achieve a healthy adjustment has shifted to the identification of factors that help patients make that adjustment. To promote psychological adjustment, patients should remain as active as is reasonably possible, acknowledge and express their emotions in a way that allows them to take control of their lives, engage in self-management, and try to focus on potential positive outcomes of their illness. Patients who can use these strategies have the best chance of successfully adjusting to the challenges posed by a chronic illness.

Lancet 2008; 372: 246-55

心理的適応の直接測定の例 Nottingham Adjustment Scale (NAS) ノッティンガム適応尺度

■ 視覚障害のへ心理的適応を測定

■ Dodds A, et al (1991), 鈴鴨ら(2001)

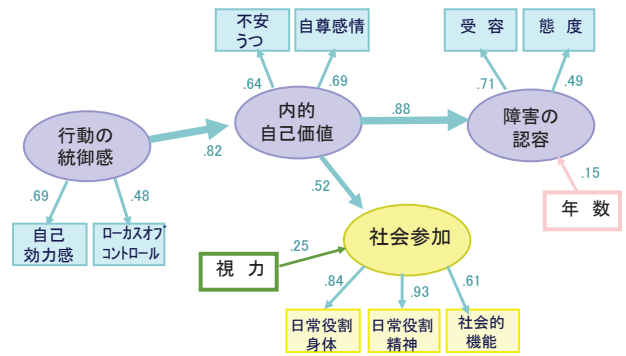
■ 心理的適応を複数の認知的変数が高い状態と定義

不安やうつがなく、自分を大事な存在と認識していて、自分には必要なことをする力があると感じており、自分の障害を受け入れ、他の障害者にも肯定的な態度を持ち、さらに、リハビリテーションを進めるのは自分自身であると認識している状態

NASの質問項目例(日本語版)

測定変数	項目数	項目例
不安-うつ	6	最近、元気がなく落ち込んでいると感じている
自尊感情	4	時おり、自分は全くダメだと思う
視覚障害者への態度	4	視覚障害者は、自分に満足していない人が多い
ローカスオブコントロール	3	これからよくなるかどうかは、自分の力でどうにかできるものではない
障害の受容	6	視覚障害であっても、人生にはいろいろな可能性がある
自己効力感	4	私は物事に失敗すればするほど一生懸命取り組む

心理的適応と社会参加の関連モデル

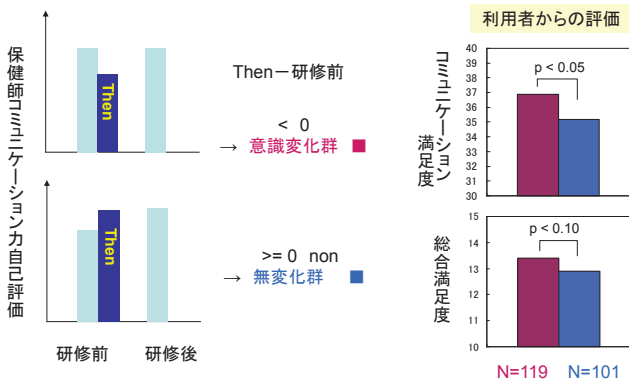


GFI=.954

Suzukamo et al. 2001

レスポンスシフトの意味

(介護予防コミュニケーション介入研究 Suzukamo, 2009)



レスポンスシフトのポジティブな側面

- Spirituality (スピリチュアリティ)
- Meaning (意味)
- Gratitude (感謝)
- Hope (希望)
- Compassion (思いやり)
- Forgiveness (寛容)
- Mindfulness (マインドフルネス)

Park CL: ISOQOL2013

レスポンスシフト研究の課題 (Barclay-Goddard R, et al. 2009)

1. 用語と理論モデルに関するコンセンサス
2. レスポンスシフトの臨床上の重要性の究明
3. 臨床的に重要な交絡因子としてのレスポンスシフトの測定方法と調整方法の確立
 - 研究デザイン手法、統計的手法、RS調整済み変数
4. レスポンスシフトが治療の対象である場合の治療手法
5. レスポンスシフト理論を現実に活用するための手法の確立

サマリー

1. レスポンスシフトとは
健康変化により、PRO尺度に回答する際の個人内の判断基準が変化すること(QOL研究の評価バイアスとして登場)
2. バイアスの調整の必要性
検出方法の開発(Then test→個別的手法、統計的手法)さらに調整手法の開発が求められる
3. レスポンスシフトのホメオスタシスとしての側面
バイアスとしてのみとらえるべきではなからう
開発された手法の積極的活用(ホメオスタシス、心理的適応、ストレス対処による変容、認知の変容、ポジティブ心理学)